

児童養護施設における育ちの援助についての一考察

- 個別的な関わりが果たす役割と意味 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域

本論文では、児童養護施設において約1年半にわたって個別担当ボランティアとして関わった5歳の男児の事例を報告し、「育ちの援助」という観点から検討した。担当児童である男児は3歳で入所して以来、ほとんど面会や外泊がない状態で、発達の基盤となる「絶対的な安心感」や「基本的信頼感」がしっかりと獲得されておらず、「引っ込み思案である」「自分の意思を表現することができない」といった課題を抱えていた。

活動当初は個別担当であることを伏せて「みんなのお姉さん」として遊びながら、担当児童をはじめ、入所している子ども達との関係を作っていった。集団の中でみんなと関わりながらも、いつも担当児童に注意を向けるという関わりを続けた。そして、担当児童との信頼関係が築けた頃、時期を見計らって担当であることを告知し、「自分だけのお姉さん」として1対1の関わりを開始した。1対1の個別的な関わりになってからの担当児童の変化・成長は目を見張るもので、わがままを言ったりぐずったりするようになったが、筆者に対してありのままの自分を出せるようになった。そして、徐々に自信を取り戻し、自分の意思を言葉で伝えることができるようになり、課題にぶつかった時も自分で選択し解決していくことができるようになっていった。

また、保育士と筆者の間では、相談したりアドバイスを受たりする中で「担当児童が今どのような課題を抱えているのか」、「どのような所につまづきがあるのか」、「どのような対応をしているのか」という共通認識を持っており、同じ保育観・福祉観でその時期に応じた関わり行えた。良い協力体制ができていたことで、担当保育士をはじめ施設職員による養育に加えて、筆者による1対1の個別的関わりが、育ちの援助において相乗効果をもたらし、担当児童の育ちを伸ばす結果になったと考えられる。

このように、「自分だけの存在」がいることで子どもは安心感と自信を取り戻し、子どもの育ちに良い影響を与えることが示された。集団養育である施設養護に1対1の個別的な関わりを導入することは、子どものパーソナリティの発達の援助、自立に向けての育ちの援助として有用であり、今後児童養護施設における育ちの援助についての1つのあり方となることが期待される。